

都市郊外ニュータウンにおける「地域社会」の可能性 —中高年者の地域観から—

武藤 由紀子

都市における地域社会がいかにあるべきかと言う議論は、これまでも多くなされてきた。しかし、それらの大部分は、しばしば地域の現状に関係なく相互扶助の実現などを要求するものであり、実際には理想論にとどまっている。本研究は、ニュータウン在住の中高年者の地域あるいは地域社会、そこでの自身の生活に対しての考えを分析することをおして、地域社会のより現実的な状況を描き出すことを目指すものである。なお、具体的な手法として、藤沢市湘南ライフタウン在住の中高年102名に対してアンケート調査を行なった。調査分析の結果、個人の地域での活動における制約要因を主に「家庭」および「ニュータウンという社会空間」という二側面から指摘することが出来た。

まず、家庭内には社会に対する公的、私的部分の夫婦での役割分担がある。地域で過ごす時間が比較的に短い、一見、地域との関わりが薄いように見える夫は、自治会や管理組合の役員等、家庭の代表としての公的な役割を担っている。一方、妻がこのような役割を担うこともあるが、彼女たちのより大きな役割はより私的な側面で果たされている。個人個人がどこでどんな活動をしていたとしても、地域内において個人は「〇〇さんの家の奥さん」「息子さん」「ご主人」…といったように、家族単位を意識して語られることがほとんどである。そして、そのことを意識・無意識的に背負っているのは、家族の中では妻・母である女性である。しかし、この役割はたとえ世帯を代表して行なわれ、対外的という意味で「公的」性格の強いものであったとしても、通常、家族には「家事」の延長線上にあるものとして見なされているか、妻の私的な

人間関係であるかのように見なされている。すなわち、妻のこのような役割が、他の家族にとっても、地域での日常生活に多少なりとも影響を及ぼしているとは感じられていないのである。その理由のひとつに、家事・近所付き合いを含めた妻の日常活動の多くが、「地域」内で行なわれ、両者の間に空間的な識別がしにくいと言うことが挙げられるのではないか。妻たちは、自分自身の用件と家族の用事を臨機応変に対応しながら時間配分をしているため、時間的な区別も不分明である。妻の個人としての活動と家族役割としての活動が、自分自身にとっても周りの人間にとっても、明確に分けられないこと、地域活動に対する報酬がないこと、これらは女性の役割や地域での活動への過小評価につながっていると考えられる。

ニュータウンは、建設の背景や入居条件などから、集まってきた住民もまた、均質であるとされる。たしかに収入面で均質性が見られるということは、生活に対する価値観もまた似た傾向にあるということが出来るだろう。ニュータウンが快適な住環境と認められ得る所以もここにある。しかし、はじめは単に入居条件の結果に過ぎなかった住民の均質性は、横並び主義という形で次第に住民を縛っていくことになる。とくに学歴の高い層では、住民同士はつくられた地域のクオリティを意識しながら、自らが周りと同質であることを望み、異質な存在は排除しようとする。まず、彼らがニュータウンでの生活に対して抱くイメージが、「標準の家族像」とでも言うべきものを作り出す。そして、それに従うのが住民としての条件であるかのように感じ、意識的、無意識的にその標準像に自らを

同化させようとする。周りに対しても同様である。今まで述べてきた家族役割に関する制約も、単に家庭内の男女分業や、夫の職住分離を促す社会的状況というだけでは語れない。ニュータウンという空間あるいはそこで人間関係が、一定の価値観に自らを合わせることが推奨しているのである。

このように、必ずしも地域に対して無関心ではない彼らを地域から遠ざけているのは、個人の地域への関わり方が家族役割によって規定されていること、ニュータウン社会においては、入居条件というふるいのもとに均質な住民が、更なる均質化を求めて自身や周囲を一定の枠に閉じ込めようとする傾向などのさまざまな要因が絡み合って生まれた結果ではないかと筆者は考えている。

では、このような住民が集う地域において、摸索されていくべき地域社会の姿とはどのようなものであろうか。地域社会の有るべき姿という、みんなが協力し合う共同的な社会という理想論が語られがちである。しかし、これまで見てきたとおり、ニュータウンではそれが本来的に持つ「均質性」という特質から、具体性のない共同化の押し付けは、横並び意識の強化につながり、溶け込めればさまざまな利点があるが、そこに合わなければ最後、入り込むことはできない閉鎖的な環境を生み出す可能性があることに留意すべきである。より快適な生活を目指すためのものであったはずの共同精神は、かえって住民たちを縛り付けるものになりかねないのである。また、妻である女性たちが担う近隣活動が、「家事」という役割の中に取り込まれることにより、その「意味」が正当に認識されないことにも触れてきた。このような状況のまま、仮に地域社会での「共同性」を求めた何らかの動きが生じたとしても、妻の役割負担が増え、他の家族がそれに無意識ながら依存する体制を強化するだけになりかねない。都市郊外に位置する「ニュータウン」住民であればこそ、相互扶助の議論は慎重に為されな

なければならないのである。

ニュータウンにある一定の価値観は、生活全体を覆っているため、その拘束性になかなか気づかされることがない。また、つくられた価値観に依っていた方が楽な側面もある。しかし、その住民として、その快適性を享受しつつ、均質であろうとする価値観に呑み込まれない、柔軟性と勇氣、抽象的でそれこそ理想論のようであるが、これこそが、中高年者がこれから地域で生活していくために求められるべき姿ではないかと思う。自分が住む地域というのは、プライベートな生活がその中に包摂され、切り離せないものであるため、そこで築かれる人間関係も煩わしさを感じさせるものになりがちである。しかし、その煩わしさの正体の幾分かは、一定の価値観に取り込もうとする周りの視線や、それを内面化し、それに従おうとする自己の姿ではないか。中高年の場合、ニュータウンということだけでなく、世代としての価値観を意識したり、経済的な依存などから夫に対して遠慮がちになり、夫の価値観を自分の価値観としている場合もあるかもしれない。しかし、自分にとって本当に快適な生活の場としての地域をもっとそれぞれがそれぞれの方法で摸索できないものか。もちろん、それは地域という範囲に縛られる必要はない。そうした個人個人の摸索が自由に許される環境こそが目指されるべき地域社会の姿ではないだろうか。そのためには、行政による住民参加システムの摸索もさることながら、住民一人一人が現在の生活観をはじめとする自分の価値観を周りから与えられたものか、自分自身のものか、見極めていく必要がある。そして、他人に迷惑を掛けるような自分勝手なものでない限りは、自分の行動も、周囲に対する評価も自分自身の裁量において取り組んでいくべきである。このことはニュータウンという「地域」においても、また、「家庭」内においても同様に言い得ることである。